

防衛大学校

Vol.23, No.1

# 図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2008. 9. 1

主な内容	頁
『ストーリーの力』(寄稿)・・・ 幹 事 君 塚 栄 治	..... (363)
教官著書の紹介..... 情 報 工 学 科 生 天 目 章	..... (364)
図書館所蔵図書の紹介..... 応 用 化 学 科 伊 達 新 吾	..... (366)
寄贈図書の紹介..... 防大九期卒業(海) 功 刀 正 文	..... (367)
図書館アンケートの結果..... 図 書 館 事 務 室 石 川 み どり	..... (368)

## 『ストーリーの力』

幹 事 君 塚 栄 治

本は読み易さだけでは選ばない。料理で言うところの食欲をそそる色や匂い、本でいうと興味をかきたてる表題や内容で選ぶことが多い。

読み終わってみるとスーと頭に入っていく本や作者の意図が良く分かる本は、その構成や話しの展開の巧みさが私達を夢中にさせ、感心させるのだ。

私は、推理小説が大好きでよく読む。彼か彼女か、誰が犯人か。作者との推理のやり取りにゾクゾクする。構成は色々あるが、まず、事件が起きて、それを過去の経緯から遡るもの、逆に過去から始まり、最後に事件が起きるものがある。これは犯人が途中で分かってしまう。あるいは二つ以上の物語が、組み合わせながら展開する複雑なものもある。

ところで不断の生活でも、人に物事を正し



く伝える場合や自分の意見を他人に短時間に分かってもらうためには、話の持って行き方、順番、ロジックが非常に大切である。特に、セールスマンは、話を聞いてもらう術に長けてないと仕事は成り立たない。

良く職場にある例であるが、上司が望んでいることが、上下左右の関係から実現できないことを如何に上司に報告し納得してもらうか、というシチュエーションを考えてみる。

このような時、あなたはどのように話の筋を持っていくだろうか？ 最初から「実現不可能でした。」と言うだろうか。いや、暗に分かってくださいというばかりに、長々と自分の努力の経緯を言ったら「結論から言え！」と言われる。それでは、「案のメリットは関係者に認めてもらったが、デメリットや実施のリスクが多いため、今回は見送るほうが、良いと思います。」という筋で言ったらどうだろうか。今回のマイナスが将来改善されれば、次には希望がもてるという流れの方が納得の助けになる。人を説得するためには話の持って行き方、ストーリーが大切である。

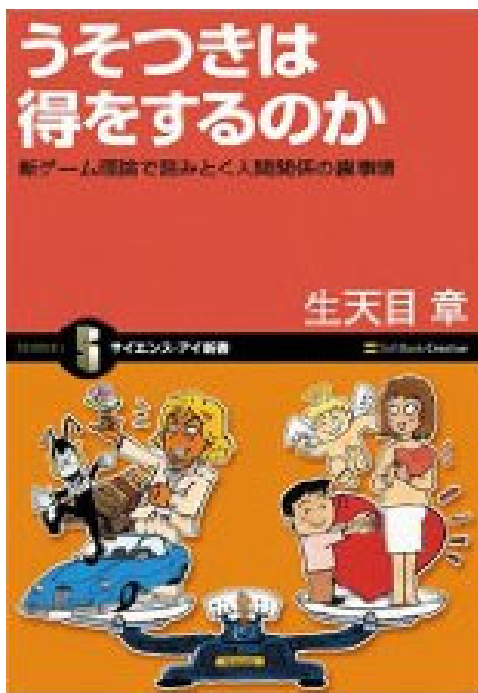
このストーリー展開で一計を案じた私の防

大訓練教官時代の話を紹介する。普段から訓練教官として、学生に実践的訓練と厳しい訓練を教育してきた。ある真夏の炎天下において、水筒の水をなるべく飲まないで訓練をする方法を考えていた時、あるストーリーを思い付いた。廠舎から遠くに割り当てられた訓練場に全員駆け足で移動し、やっと到着したタイミングを見計らい、「廠舎にて腸チフスが発生した。水筒の飲み水は危険！」の助教からの報告の後に、私も含めて全員水筒の水をこぼさせた。そして「では訓練を続行しよう。」学生たちはすぐに腸チフスは嘘だと分かったとしても、その狙いを理解し、いつもより厳しい環境下で戦闘訓練をすることができた。腸チフス発生ストーリーが学生に厳しい訓練を受け入れるガッツを与え無事に終了できたと思っている。

付け加えると、ストーリーはあくまで方法論であり、アイデアやノウハウだけで、仕事の良し悪しが決まるという浅はかな考えに終わってしまっては困る。明確な意志や精神のないところにノウハウであるストーリーはないことを強調しておきたい。

## ~~~~~ 教官著書の紹介 ~~~~~

### 『うそつきは得をするのか』



所 属

防衛大学校電気情報学群

著 者

情報工学科教授 生天目 章

サイエンスアイ新書（2008年）

この著書のタイトルに、少々驚かされたことでしょう。本がある程度売れるためには、“タイトルが大切”という出版社の意向で、このようになりました。新しく出版される本が年間で6-7万件（一日平均200冊）という今日の出版事情からして、読者の関心を引きつけるには、しかたがないことですが、

本の中身と乖離してしまうことで、自己言及的パラドックスに陥るのを危惧しながら書き上げた、という裏事情があります。

私たちは、“うそつきは泥棒のはじまり”と、教えられてきました。このことが本当ならば、この世は泥棒ばかりの世界になっていることでしょう。誰もうそつきになることを望んでいませんが、うそをついてしまうことはあります。また、誰かにだまされたくもありませんが、だます人は必ずおり、私たちの身の回りには、だまされる可能性は、いつも潜んでいます。新しい手口の詐欺事件が次から次と発生し、特に年配の方が餌食にされる事件は、後を絶ちません。また、昨今の年金問題、相次ぐ企業による偽装問題などもあります。これらには、理由がありそうです。

本書は、うそつきは得をするのか、という命題に対して、ゲーム理論の手法を使って解説しました。ゲーム理論は、友人関係、企業取引、そして外交や紛争など、かけひきを必要とする、さまざまな場面を扱います。このような誰かと対立する局面だけでなく、待ち行列での並び方、マネーゲーム（通称、美人投票ゲーム）、オークションで競るなど、私たちは日々、「社会ゲーム」に参戦しています。このような人生ゲームに勝つための秘訣は、あるのでしょうか？また、悪意のあるうそを撃退する術は、あるのでしょうか？もし、悪意のあるうそに対決しなければならないとしたら、どんなうまい方法があるのかを考えてみました。

うそをつく行為は、自己の利益の最大化を目指す合理的な考えから生まれますので、その前提が崩れ、うそをつくことは損であることがわかれば、うそをつく人は少なくなります。このとき、短期的に見て利益になる場合と、長期的に見て利益になる場合とがあります。その場をごまかすよううそは、短期的には得になりますが、長期的に見れば損になるでしょう。このことに多くの人が気づけば、やはり、うそは少なくなります。一方で、他の人のことを思いやっつくうそは、長期的得になるでしょう。

うそをついたことのない完全潔癖な人でも、他の人のうそをどのように許すかで、うそと

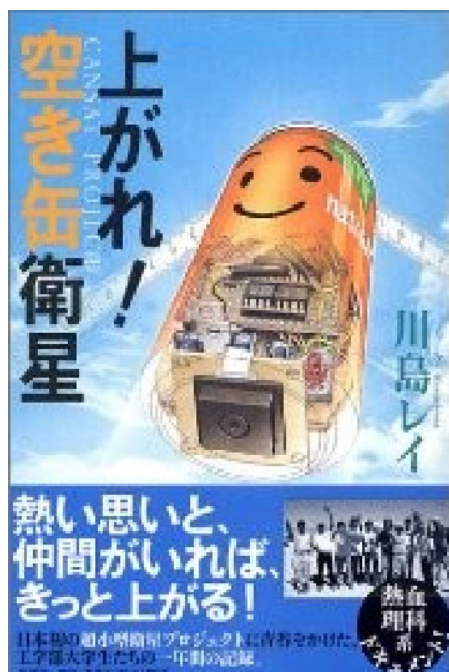
向き合うことになります。過ちをごまかし続ける人と、素直に過ちを認め心から悔いてわびる人の、どちらを私たちは受け入れるのでしょうか？うそがバレないように真実の姿を隠しとおす人が得をし、逆に正直者が損する社会なのか、あるいは真実を隠したうそが、あとで厳しく責められる社会なのかによって、私たちのうそと向き合うための態度は大きく変わってきます。

どのような社会を作るのかは、私たち一人ひとりがうそをつかないよう心がけること以上に、他の人のうそにどのように向き合うのかによって決まります。広い心で他人のうそを許すのかどうかによって、どのような社会になるのか決まることから、私たち一人ひとり社会の信用を決めるゲームに参加しています。そして、とても大切な社会の信用は、一人ひとりの小さな心がけの蓄積によって形成されるということを解説しました。

17世紀頃に活躍した著名な物理学者や数学者たちは、さまざまな社会現象を科学的に解明するための今日の礎を築きました。20世紀になると、学問体系は今のように細分化され、理系と文系の間には大きな溝ができました。一方で、社会の仕組みは複合化され、社会の営みから生まれる問題は、ますます複雑になっています。これらの新しいタイプの問題の解決の担い手には、理系・文系の枠を超えた幅広い知識、自由な発想と総合的判断力、深い洞察力やシステム思考の能力を必要とします。また、そのような人材を養成することも緊急の課題になっています。そのためには、全体の問題に関心をもって、“木を見て森をも見る”ことのできる人を多く呼び込む必要があります。この小さな新書が、そのために少しでも役に立つならば嬉しい限りです。

最後に、拙著を紹介する機会を与えてくれた関係者に、深く感謝致します。

~~~~~ 図書館所蔵図書を紹介 ~~~~~  
『上げれ！空き缶衛星』



ご紹介させていただく本書は、人工衛星の製作と無縁だった日本の大学生たちが、2つの大学研究室の若き指導教官たちの指導の下、自分たちの手で、空き缶衛星(カンサット)、そして、キューブサット(10cm角)を設計して作り上げ、いずれも世界で初めて打ち上げに成功した、本当にあった出来事を追ったドキュメンタリーの前編である。

空き缶衛星とは、スタンフォード大学トィッグス教授が提唱した、容量350mlのジュースの空き缶を筐体とした超小型人工衛星のことである。本書では、東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻・中須賀真一教授(現在)の研究室と東京工業大学大学院理工学研究科機械宇宙システム専攻・松永三郎准教授(現在)の研究室の学生たちが、1998年11月にハワイで行われた大学宇宙システム・シンポジウム(USSS)でのトィッグス先生の構想に感銘を受けて、空き缶衛星を設計・自作し1999年9月にアメリカの広大な砂漠で打ち上げて通信に成功するまでの1年間を追っている。

編 著

川 島 レ イ

編集及び紹介

応用化学科講師 伊 達 新 吾

新潮社(2004年)

空き缶衛星の開発の過程で数多くのモノが犠牲になったほか、当初は宇宙に打ち上げられる予定であったのに、打ち上げロケットの調達難により、アマチュア・ロケットに搭載させて地上4000mの上空まで打ち上げ、パラシュートで降下させて回収する方針に切り替わる事態になるなど、それぞれの研究室の指導教官及び学生たちが、全てが初体験ゆえに様々な困難・難題に直面しながら、時には寝る間も休む日も惜しんで、目標を達成すべく力を合わせて少しずつ克服していく姿が痛々しくも頼もしく、勇気づけられる。

このプロジェクトを通じて、単に人工衛星を打ち上げる目標を達成するだけでなく、複数の担当部門に分かれて部門内で協力し合う協調性、困難に負けない粘り強さ、全体を統括するプロジェクト・マネージャーには担当部門をまとめ上げる調整力、また、今までの技術の蓄積を後輩に伝承する文章表現力が養われるものと思われる。トィッグス先生が、自身の構想に狐につままれたような顔をしている学生参加者たちに投げかけた魔法の言葉”Try it. You can do it!”(やっごらん、できるよ!)は至言である。また、異なる研究室同士で、負けるものかとしのぎを削ってお互いを高めあいながら、どちらかが困った時に

手を差し伸べる友情関係が美しい。

人工衛星について門外漢の小生であるが、専門用語が丁寧に説明されていて分かりやすく、また、当事者たちの目線で打ち上げまでの経過がスリリングに描写されているために、読みやすい。そして、何よりも、本書を通じて、「やればできる」ことを教えられた。貴

台には、本書、そして、同じ研究室の学生たちが人工衛星を宇宙に打ち上げるまでの経過を追った「キューブサット物語—超小型手作り衛星、宇宙へ」（著者：川島レイ・出版社：（株）エクスマレッジ（2005年））のご一読をお勧めする。

## ~~~~~ 九期生による寄贈図書を紹介 ~~~~~ 『ホームカミングデーと図書』



この表題、「ホームカミングデー」と「図書」、二つがどういう関係なのか、何の繋がりがあるのか、疑問に思われるかもしれません。そこでその説明から入りたいと思います。

ホームカミングデーは、平成12年3月、本科第44期生の卒業式に第1期生が招待されたことから始まり、爾来毎年卒業式に43年目の卒業生が校長から招待されるという形で継続されてきています。そして本年、平成20年は我々9期生でした。そこで約2年前から準備委員会を立ち上げ、諸準備をしてまいりましたが、準備委員会を重ねるうち、卒業式は、防大の年間行事の中でも最も重要な行事であり、このような行事に数百名の卒業生を招待する学校関係者のご苦労は計り知れ

ない、従って招待を受ける期生会は学校当局の配慮、努力に感謝の気持を持って準備を進め、行事が終わった後は学校側に何らかのお礼をしよう、という話が自然に出てまいりました。

お礼のやり方についてはいろいろ案が出されましたが、できれば何か後に残るものがないとの意見が出、その時、同期の前図書館長影山君に間に入ってもらい図書を寄贈することはどうだろうかということになりました。早速影山君に相談したところいい案だ、話を進めようということになり、影山君を通じて、学校側で検討いただき寄贈すべき図書を選んでいただきました。選書の考え方は、これからの時代や物の本質を見据えたものとすべく、三つありました。

- ① 学生（本科及び研究科）の勉学、卒業研究並びに教官の研究のニーズにあった図書であり、現図書館が運営している選書分科会（図書館長委員長で全学科の教官から構成されている）の方針に沿っていること
- ② 人文社会科学関係及び理工学関係の所蔵図書の現状を加味した上で、バランスよく選ぶこと（防大図書館の蔵書は比率的には理工系が約6割、人社系が約4割であることもあり、後者の整備に比重を置く）
- ③ いずれも学生に分り易く、学術性が高く、関係出版社からまとまった形で出版されている新しい図書（シリーズ図書）を優先すること

と。この様な考えに立って93冊が選ばれました。主なものは次のとおりです。

人文社会関係図書では、『戦時日ソ交渉史(一次史料集)』、『日本生活史(写真集)』、『日本産業史(写真集)』等の今まで余り触れられることがなかった貴重資料が、また、シリーズ図書としては、東京大学出版会の、『国際社会1-7(国際社会の中の日本の進路を示唆)』及び慶應義塾大学出版会の58冊の図書(戦略的発想、現代東アジアと日本、市民社会、秩序形成、市民意識等)が、さらに、理工学関係図書では、電気通信大学出版会の16冊のシリーズ図書(エレクトロニクス基本、電子ロボット、メカトロ・PIC 実用回路等)

他です。

これらの図書を紀伊国屋書店で調達(これらはすべて図書館側にやっていただきました)、卒業式のあと4月、9期生会長他が学校長にお礼の挨拶に伺い、そのおり目録としてお渡しいたしました。

以後図書館において、寄贈受け等の諸手続きが行われ、このたび寄贈図書コーナーの一角に配架されました。先日その状況を観させていただきこのような形で受けていただいたことに改めて感謝しているところです。少ない本ですが本科、研究科の学生はじめ教職員の皆様にも活用いただけることを切に願うものであります。

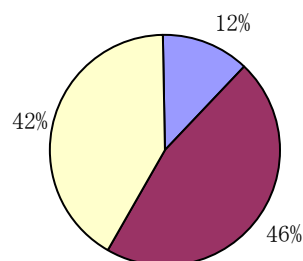
## ~~~~~ 図書館アンケートの結果 ~~~~~

### 2. 本科学生アンケート結果

#### I. 図書館をよく使いますか？

図書館事務室 史料・情報係長

石川 みどり



- 1. よく使う
- 2. 時々使う
- 3. あまり使わない

#### ○図書館利用アンケート結果について

図書館の利用実態を把握し、利用者に対するサービスを充実させるためにアンケート調査を実施した。

#### 1. 調査の対象と方法

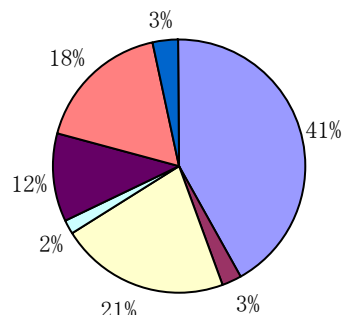
- ・調査対象 本学に在籍している学生

〔回答者数 学部学生823名  
(内留学生45名)  
研究科学生93名  
(内留学生12名)〕

- ・調査の方法 質問紙法(アンケート)による一斉調査

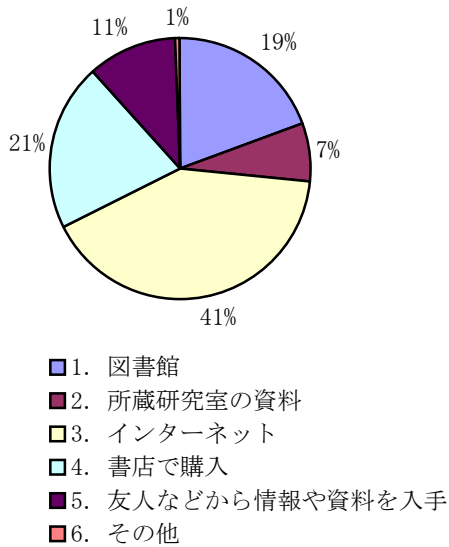
- ・実施日 平成20年3月4日(火)

#### II. 図書館のサービスを利用したことがありますか？(複数回答)

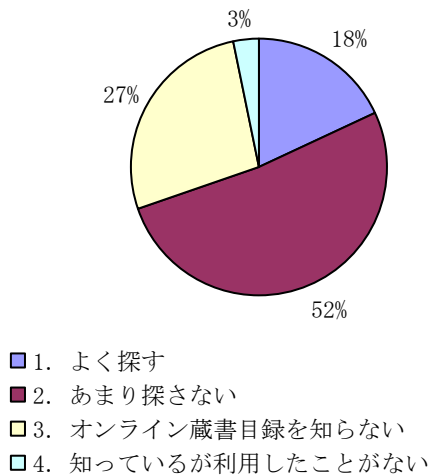


- 1. 本を探す・本を借りる・本のコピー
- 2. レファレンス(本についての相談)サービス
- 3. 雑誌を読む・雑誌のコピー
- 4. 他大学の本を借りる、他大学の本・論文をコピーする
- 5. 新聞を読む
- 6. グループ研究・研究個室
- 7. その他

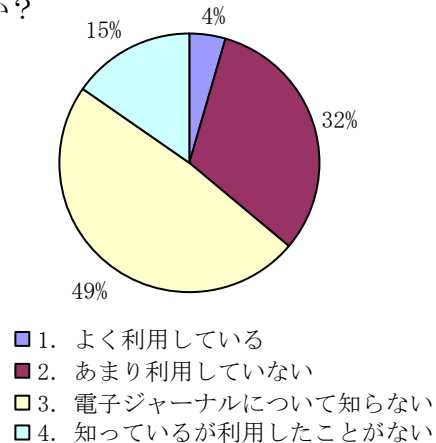
III. 学習や研究のための資料や情報はどのようにしていますか？（複数回答）



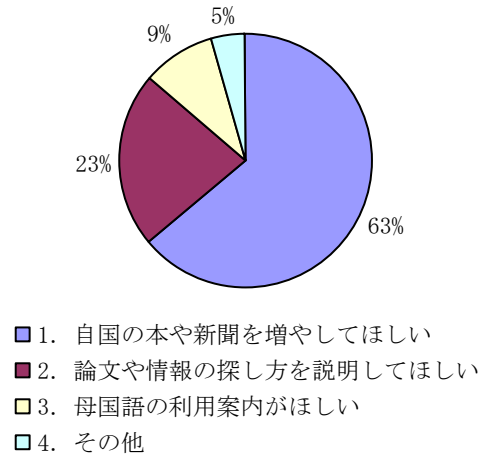
IV. 図書館のホームページ(OPAC：オンライン蔵書目録)で本を探しますか？



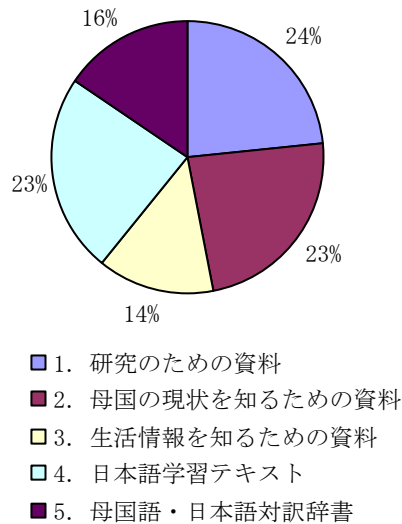
V. 電子ジャーナル使ったことがありますか？



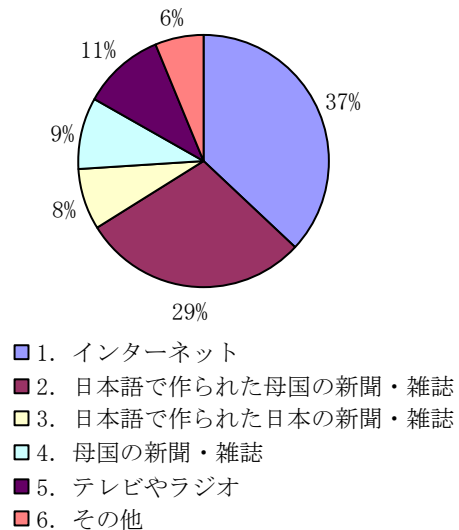
VI. 図書館にどのようなサービスを望んでいますか？（留学生対象）（複数回答）



VII. どのような本や雑誌などを図書館に置いてほしいですか？（留学生対象）

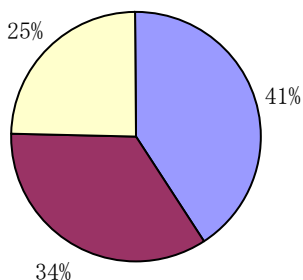


VIII. 母国に関する情報はなにを使って知りますか？（留学生対象）



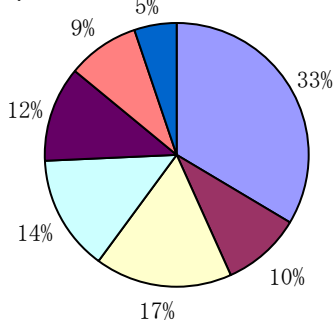
### 3. 研究科学生アンケート結果

#### I. 図書館をよく使いますか？



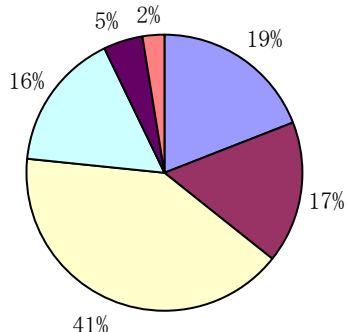
- 1. よく使う
- 2. 時々使う
- 3. あまり使わない

#### II. 図書館のサービスを利用したことがありますか？



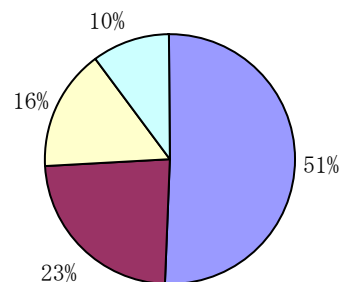
- 1. 本を探す・本を借りる・本のCopy
- 2. レファレンス（本についての相談）サービス
- 3. 雑誌を読む・雑誌のコピー
- 4. 他大学の本を借りる、他大学の本・論文をCopyする
- 5. 新聞を読む
- 6. グループ研究・研究個室
- 7. その他

#### III. 学習や研究のための資料や情報はどのようにしていますか？



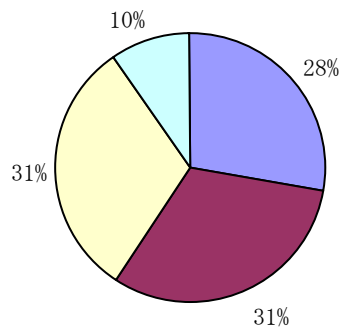
- 1. 図書館
- 2. 所蔵研究室の資料
- 3. インターネット
- 4. 書店で購入
- 5. 友人などから情報や資料を入手
- 6. その他

#### IV. 図書館のホームページ（OPAC：オンライン蔵書目録）で本を探しますか？



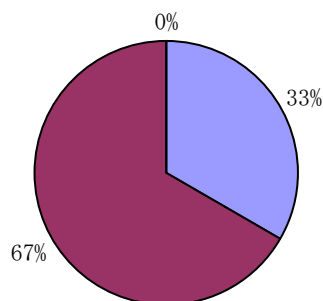
- 1. よく探す
- 2. あまり探さない
- 3. オンライン蔵書目録を知らない
- 4. 知っているが利用したことがない

#### V. 電子ジャーナルを使ったことがありますか？



- 1. よく利用している
- 2. あまり利用していない
- 3. 電子ジャーナルについて知らない
- 4. 知っているが利用したことがない

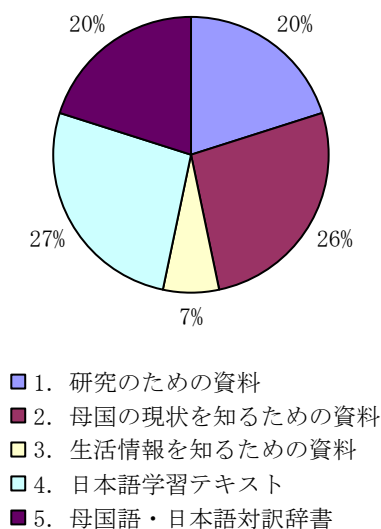
#### VI. 図書館にどのようなサービスを望んでいますか？（留学生対象）



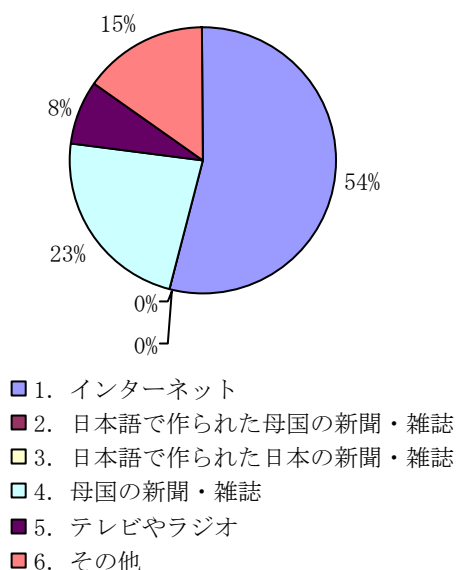
- 1. 自国の本や新聞を増やしてほしい
- 2. 論文や情報の探し方を説明してほしい
- 3. 母国語の利用案内がほしい



Ⅶ. どのような本や雑誌などを図書館に置いてほしいですか？（留学生対象）



Ⅷ. 母国に関する情報はなにを使って知りますか？（留学生対象）



4. まとめ

図書館の利用については、研究科学生が本科学士より多く利用している。本科学士は試験の前の利用や校友会のミーティングでグループ研究室を利用するとの回答が多かった。

図書館サービスについては、研究科学生は図書館が提供しているサービスを利用しているが、本科学士は図書館サービスの利用に偏りが窺える。これは必要性の度合いによるものと考えられるが、図書館提供サービスに対

する広報についても考えてみる必要があると思われる。

資料や情報を得る手段としては、本科学士も研究科学生も共にインターネットが多い。予想された結果ではあるが、情報は出所によって信頼性に差異があるため、インターネット上で得られた多種多様な情報を図書館の本や雑誌で確認をすることも必要である。

図書館ホームページ上の OPAC（オンライン蔵書目録）利用は、研究科学生が多い。あまり探さない、オンライン蔵書目録を知らないという学生が本科 79%、研究科 39%である。このことより、図書館がホームページ上で提供しているサービスの利用についても低いことが窺える。

電子ジャーナルの利用については、あまり利用していない、電子ジャーナルについて知らないという学生が本科・研究科共に多い結果となり、図書館の周知方法や広報活動に課題があることが考えられる。

留学生対象の質問より、留学生が図書館に望むサービスは、本科学士・研究科学生共に自国の本や新聞の充実、論文や情報検索の説明であることがわかった。置いて欲しい本や雑誌の種類は、本科学士・研究科学生共に同じ傾向が窺える。母国に関する情報は本科学士・研究科学生共にインターネットが多い。2番目は、本科学士は日本語で作られた母国の新聞・雑誌に対し研究科学生は母国の新聞雑誌である。日本の学生と生活を共にしている本科学士の方が日本語に慣れているのか、興味深い結果となった。

5. 取り組むべき課題として

本科学士の図書館利用者数の増加、図書館ホームページで提供する図書館サービス利用方法の周知、電子ジャーナルなど情報検索に関する支援が課題として考えられる。

図書館を利用しない、利用頻度の低い学生は、図書館や図書館資料の利用方法についての知識が無いことが考えられるため、図書館の機能や必要性を PRすると共にガイダンス以外に図書館利用に関する説明会の必要性が

考えられる。

図書館ホームページの利便性を広報し、利用方法に関する講習会の必要性も考えられる。

電子ジャーナルは学術論文検索に必須である。研究科学生は利用してはいるが、あまり利用していない31%、電子ジャーナルについて知らない31%という結果より、62%の学生が利用していないことがわかる。

レポート作成、卒論作成にも便利なものであるので、情報検索に関する説明の必要性が考えられる。

今回のアンケートを通じ、学生側の問題点と共に図書館のこれら諸課題への対応が未だ不十分であることが理解できた。今後対応策を検討し積極的に実施していきたいと考えている。

---

#### 編集後記

今後も本校図書館において、蔵書展示等を実施していく予定ですのでより多く利用者の方々に見学していただけるよう図書館員一同お待ちしております。

編集庶務担当

---

NADAL Bulletin Vol. 23, No. 1  
防衛大学校図書館だより 2008.9

---

発行所及び発行人

〒239-8686 神奈川県横須賀市走水  
1-10-20

防衛大学校図書館 Tel.046-841-3810

図書館長 村井友秀

---

編集委員

入江史郎 (体育学教育室)

吉村幸浩 (応用化学科)

講初靖 (国防論教育室)

---

編集庶務

北村孝一 (図書館事務室)

森山伸一 (図書館事務室)

---

印刷所

防衛大学校 図書館事務室

「図書館だより」事務局 出版

---